

## 連載 12 『狂った一頁』：日本映画とモダニズム文化

岩崎秋良（=岩崎昶）は『キネマ旬報』1926年10月21日号に、衣笠貞之助監督の『狂った一頁』を観た興奮を次のように記している。

日本で生まれ、最初の映画らしい映画だ。そしてまた、日本で作られた、最初の世界的映画だ。（略）彼の書いている美は、決して劇的でも小説的でも絵画的でもなく、とに角あらゆる既成芸術と無関係な（といつても良い）美である。映画的な美である。

岩崎の批評は、純映画的運動の言説とも、絶対映画（アブソリュート・フィルム）の言説とも受けとられている。岩崎は、『狂った一頁』の合評会で、「始めから筋は分からなかったのですが、僕は映画と云ふものは、ストーリーは問題ではなく、もつと直観的なもので、之から先の映画と云ふものは、決して見物にわからせるものじゃないと思ひます」（『映画時代』1926年8月）と発言している。

『狂った一頁』は、この年9月24日に封切られた。川端康成、横光利一、片岡鉄兵、岸田國士らの文学者が関わり、新聞報道は彼らを「新感覚派映画聯盟」と名付けた。脚本川端康成、衣笠貞之助、犬塚稔、沢田晩紅、原作川端康成、撮影杉山公平により製作された。スタッフには、特撮の円谷英二が本名から円谷英一の名で参加している。

舞台は精神病院。その小使の男（井上正夫）は、かつて家庭を顧みなかったために、妻が発狂したという過去を持つ。彼は、この病院に収容されている妻を小使として見守っているのだが、彼女の狂気が理由で、娘の縁談が壊れそうになるという危機を迎える。

物語内容だけに目を向けると、新派悲劇のようでもある。メロドラマのようでもある。が、無字幕で、精神病患者の内面を描くという点で、非常に斬新な表現であった。物語がないとかわからせようとしないうかよりも、物語内容と表現方法が裏腹であったのだという解釈もある。朴成培は『狂った一頁』のカメラの視点は物語の筋の流れを観客に分らせる役割を果たしてはならず、直感的で抽象的な映像のリズムとい



『狂った一頁』（1926）

う抽象美の再現に努めている」（『狂った一頁』における映画の実験の考察『映画学』17号、2003年）と、指摘した。『カリガリ博士』や『朝から夜中まで』などの表現主義映画に通じるモチーフを扱いつつも、その表現の手法、とくにカメラワークに相違が見られる、独自性が読み取れるというわけだ。狂人の視点とカメラが同化するシーケンスなどでは、めまいがするほどに映像は歪み揺れ、回転するのである。

衣笠貞之助監督は、女形の役者から出発したという、異例の経歴の持ち主だった。彼は映画の構想を練るために、当時の日本の精神病院を代表する施設であった松沢病院を見学したという。監督もスタッフも、『狂った一頁』について、ドイツ表現主義映画『カリガリ博士』との影響、受容関係については言及していない。それでも、後世の観客は、それらの間に通じ合う命脈を読み取っている。

1928年3月17日付の書簡で、梶井基次郎が川端康成に尋ねている。「あのシナリオの続きはもうお書きになりましたか」と。そこにいうシナリオとは『狂った一頁』のことであるらしい。梶井が『カリガリ博士』を見ていたことは知られているが、『狂った一頁』についてはどのような感想を抱いたのだろうか。



amazon prime video で配信されている『狂った一頁』のサムネイル